

自助努力がなかなか育ちません。同じ集落への継続的な援助も難しく、結局、一時的な支援として終わってしまふことが多いのです。こう指摘するのは、**増嶋昭子** JICA 専門家だ。そこで日本は、これまでとは全く違う視点からの支援策を打ち出した。それが、住民の「生活を改善する」ための研修だ。ここに取入れられたのが、戦後日本の農村部で行われた「生活改良普及事業」の考え方だ。増嶋



長野県松川町の農家民宿を訪れた研修員。郷土料理や囲炉裏など日本の文化も紹介された

ホンジュラスの帰国研修員のもとを訪れた増嶋専門家(中央)。各国との情報共有を密にしている

「生活を意識した開発アプローチは新鮮」、「住民が自ら考え、工夫していくことの大切さを学んだ」。研修後、多くの研修員がこうした言葉を口にしている。ドミニカ共和国の農地序で働くオネシモ・マテオさんもその一人。長野県伊那市を訪れ、生活改善に携わってきた元普及員からその体験を聞いたり、女性グループと交流したりする中で、考え方が変わったとい

生活改善で芽生えた
住民の主体性

門家は、「事業では、台所やかまどの改善、コミュニティの強化など、生活の質を見直すためのさまざまな取り組みが行われました。当時、特に厳しい状況下に置かれていた女性の生活向上に貢献したと言われている、この経験を開発途上国に生かせるのでは、と考えたのです」と説明する。研修は、この事業の有効性について検証を進めてきた JICA 筑波が、2005年に開始。中米・カリブ諸国を対象に、農村開発に取り組む行政担当者や普及員らを受け入れ、生活改善の考え方やノウハウを伝えてきた。この講師を務めた増嶋専門家は、「各国の状況はある程度理解していたので、彼らが帰国後に実践できるように実例をできるだけ多く紹介するように心掛けました」と振り返る。

「伊那市の人たちの生き生きとした表情を見て、自分には、住民に対する意識付けが足りなかったことに気付きました」。帰国後、オネシモさんは同僚らにも生活改善の考えを広めようと、数々のセミナーを開催。また懸命な働き掛けが功を奏し、農地庁の中に「生活改善課」が設置され、その責任者を務めることになった。「住民との信頼関係を築くことを第一に考え、定期的に農村部を訪問しています。何が課題で、何ができるのかを住民に問い掛け、自分たちで考える。過程を大切にしています」とオネシモさん。土間にコンクリートの床が張られたり、畑に有機農法が導入されるなど、住民の声を反映した変化が少しずつ生まれている。

さらに06年には、中米・カリブ8カ国による帰国研修員ネットワーク (REDCAM) が発足した。会議を通じて取り組みや課題を共有するなど、国を越えたつながりが生まれている。中でも各国の注目を集めるのが、担当省が他の機関とも連携して取り組んでいるコスタリカだ。コーヒー栽培の専門家を招き、環境に配慮した栽培法について研修を行ったほか、青年海外協力隊と共に住民の栄養改善にも取り組んでいる。オネシモさんは今年、この地区を視察し、そこでの活動を自国でも展開しよう



他国の取り組みを参考にしようと、エルサルバドルの普及員らから聞き取りを行うオネシモさん(左)

青年海外協力隊が栄養改善指導を行っているコスタリカのアラサンピャ地区 (撮影: 今村健志朗)



地面に石を置いただけのかまどを、少量の薪で調理ができ、煙が部屋に充満しないように改良した

美しいカリブ海のビーチが広がる、ドミニカ共和国。欧米からの投資が活発な観光業が経済成長を牽引し、一人当たりの国民総所得も中米では比較的高い。ところが、農村部の生活は、リゾート地のイメージとはかけ離れている。モンテプラタ県のマジガ

農村開発に生かされる
戦後日本の経験

美しいカリブ海のビーチが広がる、ドミニカ共和国。欧米からの投資が活発な観光業が経済成長を牽引し、一人当たりの国民総所得も中米では比較的高い。

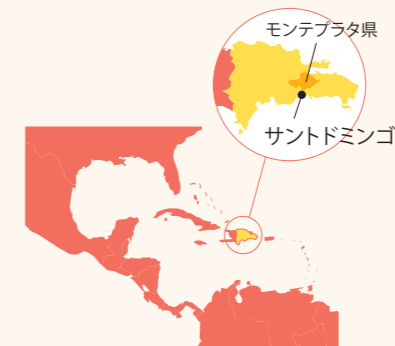
村を訪れると、家の壁は、コンクリートではなくヤシの木。調理に使うのは、ガスではなく薪。さらに住民が寝る場所は、ダニだらけの土間。都市部と農村部の貧富の格差は、この国にとって大きな問題だ。現地政府は長年、農家に資材を提供し、生産性の高い農業を教え てきたが、効果は限られていた。「この方法では、住民の主体性や



乱雑だった部屋に整理棚を作ったホンジュラスの女性

地域の将来を変える
小さな努力

経済格差の是正が課題となっているドミニカ共和国。劣悪な環境にある農村部で、今、住民一人一人の「生活を改善する」取り組みが進められている。現地ではどのような変化が起きているのだろうか。



from ドミニカ共和国
Dominican Republic